慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スペンサーにおける「利己性」と「利他性」
Sub Title	Egoism and altruism in Spencer
Author	久野, 真隆(Hisano, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2023
Jtitle	エティカ (Ethica). No.16 (2023.) ,p.51- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20230000-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スペンサーにおける「利己性」と「利他性」

久 野 真 隆

はじめに

スペンサーは『倫理学のデータ』（*The Data of Ethics*, 1879）において、科学的な基礎を持つ行動の規則を確立することを目指した。『倫理学のデータ』では、まず一般的な行動の特徴が記述される（第１章）。そして、「行動」の進化の仕組み（第２章）へと議論が進み、さらに行動に関して「善い行動」と「悪い行動」の特徴づけがなされ、（第３章）その後、「行動」に関する善悪を判定する方法（第４章）が論じられている。これらの議論をふまえて、第５章から第８章、身体的観点（第５章）、生物学的観点（第６章）、心理学的観点（第７章）、社会学的観点（第８章）では、各々の４つの観点から行動に対する考察が行われている。

本稿では、以上の内容をふまえつつ、『倫理学のデータ』の中で論じられている 11 章・12 章・14 章（利己性 対 利他性（第 11 章）、利他性 対 利己性（第 12 章）、利己性と利他性の調和（第 14 章））の内容を中心に論じることで、スペンサーの人間観の一端に迫ることを試みる。

１．利己性 対 利他性

スペンサーは人間における利己性（egoism）と利他性（altruism）[1]は、

1　egoism / altruism の単語は、内井（1996）ではそれぞれ「利己主義」/「利他主

利己性が利他性に先行するとまず始めに主張する。

> 倫理学は、非倫理学的な思考では認められている、利己性は利他性に対して先行するという真理を受け入れなければならない。[2]

この箇所でスペンサーが主張していることは、利己性は利他性に対して先行するという非常に単純なものである。そしてこの箇所で言及されている非倫理学的な思考とは、生物は何かの行為をしうる以前に生きなければならないというものである。スペンサーはこのように考え、自己保存に関わる行為がその他すべての実行可能な行為よりも絶対的に先行するという系を導出している。今述べた自己保存の優先性が行動の一般法則として受け入れられ、全ての生物によって守られているとすると、もし仮に自己保存に関する行動が他の行動よりも後回しになってしまえば、全ての生物は自分の生命を失わざるを得なくなってしまうのである。したがってスペンサーは、人間が生物としてもっている本性として利己性が利他性に先行し、自己保存の優先性を主張している。

> 自己保存の継続ために必要とされる行為は、その行為により達成される利益の享受も含め、普遍的な幸福にとってまず第一に必要不可欠なものである。もし、各々が適切に自分自身に対して配慮をしなければ、その個人がなす他者への配慮は死によって終止符が打たれる。そして、

義」と訳されているが、スペンサーが当該箇所で使用している egoism / altruism は、何らかの倫理的な主張について用いられているのではなく人間本性について使用されている言葉であることをふまえて、本稿では「利己性」/「利他性」という訳語を用いる。また引用箇所の訳に関して、内井（1996）と柘植（2020）を適宜参考にした。

2　Spencer, H. 1978 [1879-93]. *The Principles of Ethics*. PART I, p.217. 以下、同書からの引用・参照は頁数のみを記す。

> もし個人が死ぬと、配慮されるべき他者も 1 人も残らないことになる。（217）

スペンサーによれば、自己保存のために必要とされる行為をまず最初に必要不可欠なものとしないと、自己が消滅し、その自己が本来配慮すべき相手である他者も自己保存が成り立たないと消滅してしまうことから、まず利己的に行為すること、すなわち自己保存が優先されると主張している。さらにスペンサーは利己性について次のように続けている。

> この利他性に対する利己性の永続的な優位性は、現存する生命を考察することによって明らかになっているが、それは進化の過程にある生命を考察することによってさらに明らかになる。（217-218）

このスペンサーの主張から、スペンサーは利己性が利他性に対して常に先行し、優先されると考えていることが読み取れる。その根拠は先に述べた自己保存のために必要とされる行為をまず最初に必要不可欠なものとしないと、自己が消滅するばかりでなく、配慮されるべき他者も消滅してしまうというものである。

このスペンサーの考えの元には、当時の新たな思想出会った進化論があると考えられる。それはスペンサーが次のように述べていることからも窺える。

> 地球上に広く存在してきた膨大な量と多様な種類の生命は、各個体がその存在条件を満たすために持っているあらゆる適性によって利益を得るという法則に従うことで進歩してきた。その統一原則（the uniform principle）は、より優れた適応はより大きな利益をもたらすというものであった。（218）

スペンサーは、より大きな利益はより優れた適応者の繁栄を増大させると同時に、より優れた適応を多かれ少なかれ受け継ぐ子孫を残す能力も増大させると述べている。そして暗黙の了解として、その統一原則は、生存闘争で不利な立場に立たされたうまく適応できなかった個体は、その結果生じる弊害を背負うということも含まれている。ここでいう弊害とは、その不完全さが極限に達したときに消滅するか、あるいは、その不完全さを受け継いで後世に残る子孫の数が減り、衰退していくかのどちらかのことである。

スペンサーは上述した、より大きな利益はより優れた適応者の繁栄を増大させると同時に、より優れた適応を多かれ少なかれ受け継ぐ子孫を残す能力も増大させることを「生得的優越性」と呼ぶ。続けて、スペンサーは「後天的優越性」についても同様であると論じている。ある種族の任意の構成員における幸福を促す余分な活動は、その構造のうちにそうした余分な活動を遂行するためのより大きな能力を生み出す。一方で、機能の低下は構造の低下につながり、未使用の能力の低下は、その能力に関連する目的を達成する力の喪失を伴う。その結果、生命を維持する能力が低下する。そしてスペンサーは遺伝によって、このような機能的に生み出された変化が後世の生存を促進したり、妨げたりするのであると主張している。

以上より、スペンサーは人間の利己性・利他性に関する議論を進める際に、進化論に依拠して考えていることが以上の箇所から読み取れる。以下では、その考えがさらにはっきりと表れている箇所を少し長くなるが引用する。

> 先祖に由来するものであれ、自ら作り出した変化によるものであれ、各々の生物は自らの本性の恩恵と弊害を受けなければならないという法則が、生命が現在に至るまでに進化してきた元となる法則である。そして、生命がどれほど進化しようとも、この法則は続くに違いない。この自然な行動様式が、現在あるいは将来、どのような変更を受ける

としても、それは致命的な結果を招かない限り、本質的にその法則を変えることのできない変更である。優越性が自身が優れていることの報酬によって利益を得ることをかなりの程度妨げるような取り決めや、劣等性が自身が劣っていることがもたらす弊害から身を守るような取り決め、つまり、劣等であることを優越であることと同じようにする傾向のある取り決めは、有機体の進歩やより高次な生命への到達に真っ向から反対する取り決めである。しかし、各個人が、受け継いだり身につけたりした自分自身の力によってもたらされる利益を享受しなければならないと言うことは、究極の行動原理として利己性を宣言することである。それは、利他的な主張よりも利己的な主張が先行しなければならないと言うことなのである。(218-219)

スペンサーは、この自己保存と利己性の関係および利己性が利他性に優先されることを何度も強調している。そして、これらは生物学的観点を見れば明らかであるが、また倫理学的観点においても明らかであり、これらの２つの観点を切り離すことはできないと論じている。生物学的観点において利己性の利他性に対する先行に関して、進化論の教義に同意している人々はこれに異論を挟むことはないとスペンサーは主張する。また、倫理学的観点においては、同様の帰結に至ることは避けられないということはすぐには認められないだろうともスペンサーは述べている。それは生物の発達の場面では、今述べたような利己性の利他性に対する先行という普遍的な原則がうまく作用しているのが一目瞭然であるが、幸福の増大という観点に立つと、この法則がうまく働いているかどうかが一目ではわからないからである（219)。

スペンサーは『社会静学』においても、幸福は「諸能力が適切に発揮」されることによってもたらされると考えている（Spencer, *Social Statics*, 1851, p.8.)。この利己性の利他性に対する先行においても、能力の発揮と

幸福の増大の関係から考察を加えている[3]。 スペンサーは、能力が発揮される場合は幸福がもたらされ、発揮されない場合は不幸がもたらされると主張する。この能力には、身体的なものと精神的なものの両方が含まれている。そして、先に述べた究極原理としての利己性の先行の根拠である各個人が、生得的に受け継ぐ能力や、後天的に身につけた自分自身の能力によってもたらされる利益を享受しなければならないということを念頭におき、スペンサーは次のように主張する。

> ある種の各々の個体がそれ自身の性質の結果を受けとり、その性質を共にしてしまう各々の個体の子孫もまた自身の性質の結果を受けとるというこの法則は必然的に、より幸福な個体の増加を促進し、より幸福でない個体の増加を妨げることで、種全体としての幸福を増大させる傾向がある。このことはすべて、他の生物と同様に人間にも当てはまる。私たちが強いられる結論は、社会の諸条件によって規定された限界の中での個人の幸福の追求が、最大の一般的幸福を達成するための第一条件であるということである。(220)

この箇所ではスペンサーは生物学的進化の原則に依拠して、自分の能力を十分に発揮できるような個体を増やすことが、どの種にとっても最大幸福への第一条件であると述べている。自身の能力を適切に発揮する個人で構成される共同体では幸福が相対的に大きく、そうではない個人で構成され

3　どのような種類の、どのような程度の能力不足も、直接的にも間接的にも不幸をもたらす。直接的には、不十分な能力が過剰に発揮されることによる苦痛によって、そして間接的には、福利に対する特定の条件が満たされないこと、あるいは不完全に満たされることによって不幸がもたらされる。反対に、必要なもの対して十分なあらゆる種類の能力は、直接的、また間接的に幸福をもたらす。直接的には各能力の正常な発揮に伴う喜びによってであり、間接的には、達成された目的によって促進される喜びによって幸福がもたらされる（219)。

る共同体では幸福が相対的に小さいか、非常に小さいことが認められなければならないとスペンサーは主張する。

しかし、スペンサーは利己的であることの全てが幸福に資すると単純に考えているわけではない。スペンサーは不適切な利己性によって全体としての幸福の減少がもたらされるとも考えている。まずスペンサーが考えているのは、遺伝の証拠に反する不適切な利己性である。スペンサーは倫理学者たちが、受け継いだ性質によって後世の人々にもたらされる行動の影響を無視していることを指摘する。通常では、健康、強さ、能力が伝わるが、一方で、病気、衰弱、愚かさが一般的に子孫に再び現れるとすれば、合理的な利他性には、心身を最良の状態に保つことに伴う満足を受け取ることによって示される利己性を主張することが必要であると述べる。スペンサーは、正当な自己配慮によって子孫に幸福がもたらされる一方で、行き過ぎた自己軽視は不幸をもたらすと主張している。スペンサーは能力の遺伝が倫理学において考えられていない現状を批判し、「個人の幸福を無視することが胎児に与える恐ろしい害悪と、個人の幸福に注意を払うことによって胎児にもたらされる計り知れない恩恵を無視することには驚かざるをえない」（222）と述べ、次のように主張する。

> 正当な職務遂行に伴うあらゆる欲望を満足させる程度には、利己的でなければならないということだ。（…）それは、人生が提供するさまざまな快楽を適度に求めなければならないということである。（…）豊かな活力とさまざまな嗜好に恵まれている人は、機会があれば様々な種類の満足を得ることができる。（…）そして、遺伝が否定されない限り、人生が提供する様々な楽しみを適切に受け入れることが、後世の享受能力を高めるという推論が成り立ち、親が退屈な単調な生活に拘泥してしまうと、子孫が持つ幸福を最大限に活用する能力を低下させることになる。（222）

自己配慮がきちんとできている個人は、機会あるごとにさまざまな種類の満足を得ることができる。しかし、そうでない人はあまりに無気力で、身の回りの物事に興味がないため、自分自身を楽しませる努力すらできない。そして、遺伝の能力が認められている限りにおいては、後者は子孫に対して悪影響を与えてしまうことになる。この悪影響は利己性が利他性へ過度に従属してしまった場合に間接的にもたらされるものであるとスペンサーは主張している。

また、こうした間接的に生じる一般的な幸福の減少を超え、直接的に生じる一般的な幸福の減少がある、とスペンサーは主張する。

> 自己配慮を十分に行い、自分自身を健康で、精神の高揚保つ者は、第一に、それによって周囲の人々にとって直接的な幸福の源泉となり、第二に、利他的な行為によって彼らの幸福を増大させる能力 を維持する。しかし、行き過ぎた自己犠牲によって身体的活力と精神的健康が損なわれた者は、第一に、周囲の人々にとって憂鬱の原因となり、第二に、周囲の人々の福祉を積極的に増進させることができなくなるか、あるいはその能力が低下する。(223)

スペンサーは個人が自己配慮をできているか否かで、他人の喜びを生み出す人がいること、また憂鬱によってその輪に入るたびに憂鬱を投げかける人がいることを指摘する。前者の人間は、溢れんばかりの幸福を示すことで、他人のために積極的に努力すること以上に、他人の幸福を増大させる可能性がある。しかし、もう一方の種類の人間は自分の存在や行動によって幸福を増大させる以上に、他人の幸福を減少させる可能性がある。以上よりスペンサーは幸福は人から人へと伝染するものであると考えており、身体の健康や精神の高揚をもたらすような自己配慮は他者への恩恵であり、肉体的・ 精神的な苦痛をもたらすような自己軽視は他者への害悪であると考えていることがわかる（223)。

こうした議論を経て、スペンサーは利己性・利他性に関して、「適度に利己的な個人は、利他的活動を可能にする力を持っている。適度に利己的でない個人は、利他的である能力を多かれ少なかれ失う」（224）と主張する。さらに、利己性が利他性に対して、適切に従属しない場合は、直接的にであれ間接的にであれ、利己性が過剰に押し出されると、「個人個人の欲求かがおよそ同じようなものであり、ときに互恵的になることなく、永久に片方に押し寄せると（…）寛大な人によって日々利益を貪欲な人間に引き渡すことは、貪欲さが増えていく原因となり、そしてそれは、耐え難く、無節操な利己性が周りの人すべてに拡がるまで続く」（226）ことになるとスペンサーは主張する。こうした無節操な利己性は、利己的な個人にとっても、そうでないものにとっても致命的な影響を及ぼすのである。また、この利己性が不適切に利他性に先行することによって起こる精神の退廃は、利他的な人間から寛容という徳性を奪うことにつながる。そしてこの悪循環に陥った社会では、国民の道徳的な傾向の低下をもたらし、結果として、貧困者に対する自主的な社会改革を行う機会を奪うことになる。そして、そのような退廃が進んだ社会では、弱者に対して慈善の精神を働かせることで、弱者が自立するようになる機会を奪ってしまう。従って、適切な自己配慮が行われず、自己配慮がされないことにより弱められた精神や身体を子孫に残すことで、その子孫の幸福が減ってしまうことになる。そしてこのような適切な自己配慮がされない利己性に基づく利他性は、本来の利他性ではなく、人々の道徳性格を歪めてしまう利他性である。

したがって、スペンサーは、利己性は利他性に先行するものであるが、見てきたように、利己性は他者の幸福に対しても、直接的かつ間接的に影響を及ぼすものであるとスペンサーは主張している。このような議論を経て、スペンサーは以下の結論に到達する。

> 利己性が利他性に必要性の順序において先行するということは、このように明確に示された。持続する生を可能にするような行為は、概ね、

> 生が可能にする他のすべての行為、それには他者に利益を与える行為を含むが、そういった行為よりも絶対のものでなければならない。現に存在しているような生から、進化を伴うような生に転じた場合にも、同じように持続する生を可能にするような行為が絶対のものでなければならないということが等しく示される。感覚を持つ動物は、低次なタイプから高次なタイプへと進化してきたのである。そして、その進化は、優れたものはその優越性によって利益を得て、劣ったものはその劣等性からくる不利益を被るという法則に基づいたものである。生の継続のためにばかりなっているのではなく、幸福の増大のためにも、この法則に合致することが、今までも必要であったし、現在でもなお必要なのである。その理由は、優れたものは、必要性に対してもよく順応した諸能力—したがって、より大きな快楽とより小さな苦痛をもたらすような諸能力—を備えているものだからなのである。（227）

この引用部で見られるような法則に従うことは、先に述べた生物学的観点だけでなく、最大幸福に貢献するか否かという倫理学的な観点においても必要である。そして、適切な自己配慮を含意している利己性は自分自身の幸福、および自分の子孫の幸福に関わってくるものである。そして、スペンサーはこの利己性を適切な利己性を意味する言葉である「合理的利己性」（rational egoism）と呼んだ。この利己性は、見てきたように、他者の幸福に対しても直接的にも、間接的にも影響を及ぼすものなのである。利己性の利他性への不適切な先行は悪しきものにしかならないが、「合理的利己性」は利他性と互いに通じ合っている利己性なのである。

２．利他性 対 利己性

スペンサーが利己性と利他性を考える際に「合理的利己性」を提唱し、利己性は利他性に先行すると主張する。しかし、一方でスペンサーは利他

性も人間性において利己性に劣らず本質的なものであると主張している。

> もし我々が利他的な行為を、通例のように自己に利益をもたらすのではなく他者に利益をもたらす全ての行為と定義するのであれば、生命の夜明け以来、利他性は利己性に負けず劣らず本質的ものであった。一次的には、利他性は利己性に依存しているのであるが、二次的には利己性が利他性に依存しているのである。(230)

スペンサーの利己性と利他性は、利己性が利他性に優先されることが主張されているものの、相互に影響関係を持つものである。この利他性が発揮される行為をスペンサーは子孫が保存され、種が維持されるものでと述べている。そしてその行為には、意識的に子孫の保存・種の維持を目指すものもあれば、福利の心的表象を伴うことなく子孫に福利をもたらす無意識的なものもある。そして、スペンサーは利他性に関する議論を、身体的利他性（physical altruism)、諸感情を伴うが意識にはのぼらない利他性、意識的な利他性というように段階に分けて考察をする。スペンサーは生命は意識の有無にかかわらず、自らを犠牲にして、子孫の保存・種の維持を目指し、子孫に福利をもたらそうとするという点において、利他性は生命にとって本質的なものであると主張する。

まずスペンサーは、原核生物の細胞分裂の過程や、生殖過程における利他性について考察する。スペンサーは原始的な生命の利他性を身体的利他性と呼び、利己性を身体的利己性（physical egoism）と呼ぶ。この段階での利他性は、諸感情を伴うことがなく、大部分が本能的に行われる。そして、この身体的利他性とは、親となっている生物や細胞が自身の全体を部分に分けることで子孫を形成することを指している。原核生物の場合は、本能的に自身の体を体細胞分裂によって文字通り２つに分割している。また、 生殖過程に関しては、親のある程度組織化されている部分を犠牲にして、子孫の形成をしている。こうした身体的な利他性は、動物の本能に

組み込まれているものであり、無意識的な利他性である。そして原核生物などの場合は、このような無意識的な利他性しか持ち得ないとスペンサーは主張している（232）。

次にスペンサーは感情などを伴うが意識にはのぼらない利他性について論じる。ここでは鳥類や哺乳類の動物が例に挙げられている。こうした類の動物の利他性は意識的ではないとスペンサーは述べている。その理由はこれらの動物は子孫の繁栄についての心的表象を持っていないか、あるいは持っているとしてもかなり漠然としたものだからである。しかし、スペンサーはこの利他性を、原核生物の利他性とは異なり、より高次なものに分類できるとする。それは、自分の子供が危険にさらされたときに助けようとすることや、自分の子供が亡くなったときに悲しみの感情を示すことから、これらの類の動物による子孫への利他的行為は感情という付随物を明らかに伴っており、その点において前述した身体的利他性とは異なるとスペンサーは主張する。

これらの利他的な行為について、スペンサーはその本質を個体における何らかの身体的、または物理的な損失によって他の個体に利益がもたらされることに見出している。

> 私が主張したいのは、進化の過程で、種の福祉のために個体が行う、純粋に物理的で無意識的な犠牲から、意識的に行われる犠牲に至るまでの進歩があったというだけではない。私が主張したいのは、初めから最後まで、最も低次な観点に還元すると、こうした犠牲は本質的に同じ性質、すなわち最後の段階にも、最初の段階にも、実質的な身体の損失が関わっているということだ。（233）

ここでいう身体的な損失は、今述べてきたような、卵細胞などの例に見られるようなものである。 それに加えて、スペンサーは、親が子供に対して行う授乳の例を挙げている。このように身体的な物質の損失を利他的な

行為の本質だとスペンサーは述べている。

さらにスペンサーはこうした自己犠牲について「自己犠牲は、自己保存に負けず劣らず本質的なものである。（…）利他性は利己性と同時に進化してきたのだ」（233）と主張する。また、通常の利己的行動が不足することは生命力の衰えや喪失を招き、結果として利他的行動を行う能力の喪失を意味する。その一方で、子孫の死や不十分な発達を引き起こす利他性の不足は、十分に利他的ではない性質を将来の世代から消し去ることになり、結果として適度な利己性を減少させる。要するに、各種は絶えず過度に利己的な個体を取り除きつつ、過度に利他的な個体を失っているとスペンサーは論じている。

スペンサーは、「無意識の親による利他性から最高度の意識的な親による利他性へと段階的に進歩してきたのと同様に、家族内の利他性から社会的な利他性へと段階的に進化してきた」（234）と主張している。スペンサーは、家族関係における利他性を主に子供の養育に見いだす。子供の養育を考える場合、幸福の意識は単に個人の幸福にとどまるのではなく、利他性の発揮によって、家族的なものとなる。個人の幸福を考える利己的な意識は、家族関係においては、家族の他の構成員の幸福に依存している。したがって、 家族の構成員の幸福の減少が、他の構成員の幸福を減らすことにつながる。逆に言えば、他の構成員の幸福を増加させるように利他的な精神を働かせた場合は、個人の幸福をより高めることになる。 家族関係においては、このような仕組みが自然と働くので、行為の目的となる他の家族の構成員の幸福の実現においても快の感情が生じることになる。そして、スペンサーは、一夫一婦制が定着し、このように血縁関係の中で利他的な精神を働かせた結果として家族内での助け合いが確立することが、同族、部族、部族の連合、最終的には血縁に依存しない社会の中で利他的な精神を働かせることのできる連帯意識を生み出す必要条件だと述べる。

しかし、血縁関係にはたらく他者配慮の度合いが強調されすぎてしまうと、血縁関係内のつながりが強固になりすぎてしまい、血縁関係の構成

員の外部への他者配慮が欠如してしまう。したがって、スペンサーは、緊密な血縁関係が成り立っている家族の中での助け合いを確立することがまず重要であり、そして、その関係が、同族や部族、あるいはそれらの連合に拡大し、最終的には血縁に依存しない社会の中で助け合いの関係が生じるのだと主張する。このようにして、利他性は社会へと拡張されていくのである。

このように述べた後、スペンサーは「消極的利他性」（negative altruism）[4]という言葉で、直接的な侵害を妨げるように利己的な衝動を抑制することを含むもの利他性を考えている。他者の権利に対する直接的な侵害を防ぐことは、原則的には自己保存のために最低限必要とされる協調関係として現れている。

> もしも人がそれぞれ別々に生活をする代わりに、防衛やその他の目的で、団結したとすると、その集団から不利益よりも多くの利益を享受するに違いない。平均して、個人が他者と協力することによってもたらされる利益は、ある集団において生じる他者との軋轢によって失われる利益よりも大きい。したがって、結局、社会状態がもたらす利己的な満足の増大は、他者の要求をある程度認識するのには十分に足る利他性によって獲得される。（235-236）

他者に対する配慮に関して、このような他者の要求の認識をすることは、自己保存にとっても必要不可欠であるというのがスペンサーの視座である。これは先に引用した「適度に利己的な個人は、利他的活動を可能にする力を持っている。適度に利己的でない個人は、利他的である能力を多かれ少

4　スペンサーは、この消極的利他性が含意するものについて以下のようにまとめる。 それは、（1）公正であること、（2）他者との関係に正義を見出すこと、（3）この正義を管理するもの、大部分は、利己的な満足に依存しているものを支持しかつ改善していくことである（238）。

なかれ失う」というスペンサーの言葉が示唆するところである。この引用部でも見られるようにスペンサーは、利他性を働かせることが、利己的な利益につながるという見解を示している。この利他的な側面が、利己的な満足を高め、利益につながることを「利他的快楽の利己的な側面」（the egoistic aspect of altruistic pleasure）と呼ぶ（243）。さらにスペンサーは以下のように続ける。

> 利他的な快の感情を、より高次の利己的な快の感情に分類することは大きくためらわれるかもしれないが、しかし、生活を向上させ、またその結果、個人の幸福の実現を促進するという直接的な効果が、直接的に利己的である感情と同等であるという事実を認めざるをえないのである。そして、このことから、直接的な効果においてさえも、純粋な利己性よりも利他性によってその質を高められた利己性の方がより利己的に有益であるということが言えるにちがいない。というのもその利己性は、快の感情が追加されるだけでなく、生命力の増大を通じて、一般に、快の感情のための能力を増大させるからである。（243）

スペンサーはこのように述べ、利己性と利他性の調和に着手する。スペンサーは、利己性の場合と同様に、利他性においても、あらゆる種類の快の感情は、自分自身の身体的な状態を高め、生活を向上させるものであるとした。この利他性は、道徳感情とも大きな関わりを持っていると考えられる。もし他者が苦しんでいるのを見ることで自分が身体的ないし精神的に減退し、また逆に、他者が快楽を感じているのを見ることで、自分が身体的ないし精神的に高められていくのであれば、他者の苦痛を減らし、快楽を増大させる試みは、どのようなものでも、自分自身の感情とつながりを持つということになる。つまり、利他性は自分自身を身体的ないし精神的に高めていくことにつながり、利己的な快楽を得る可能性が高められていくことになる。したがって、引用部に見られる「純粋な利己性よりも利他

性によってその質を高められた利己性の方がより利己的に有益であるということが言えるにちがいない」という結論に至り、さらには利己性と利他性の相互依存を認めるのである。

３．利己性と利他性の調和

前節までの議論では、利己性が利他性よりも一次的に優先されるが、二次的には利己性は利他性に依存していることを確認し、スペンサーにおける利己性と利他性の相互関係について論じた。スペンサーは、さらにこの相互性のある利己性と利他性の調和に力を注いだ。本節ではこの利己性と利他性の調和について論じる。スペンサーが利己性と利他性の調和を目指すのは、次のような考えに基づいている。

まず、利己性と利他性は相互性があるものの、対立するものである。しかし、対立する主張がそれぞれ妥当である、あるいは部分的にでも妥当である場合においては、純粋な利己性と純粋な利己性の両方が不当であるという推論をせざるを得ない。「自分自身のために生きる」ということが間違っているならば、「他人のために生きる」という格言も同様に間違っていることになる。このように考えると、利己性と利他性の妥協が唯一の可能性となる。

スペンサーはこの利己性と利他性の妥協の議論を進める上で、二つの主張のうちの一つを極端な形で述べることで、そこに含意される不合理を見て取るという方法を採用する。スペンサーは極端な形態の利己性ではなく、極端な形態の利他性からこの問題を考える。その理由は極端な形態の利己性を考えると、個人の欲望を瞬間的に無制限に満たし、他のすべての存在を完全に考慮しないと普遍的な対立と社会的崩壊を引き起こすことを私たちはみな理解しているからである。

スペンサーによれば、この利己性と利他性の「妥協」は、両者が永続的に対立することを意味しているように思われる。というのも各自が自身

の幸福を追求しつつも、他者の幸福にも配慮することは、一方の目的をどの程度追求し、他方をどの程度考慮すべきかという、絶えず繰り返される問いを必要としているからである。スペンサーの言葉を借りれば、不協和音こそないが完全な調和が欠如している状態がそこにはあるのだ。

しかし、この完全な調和の欠如は必然的な結論ではない。スペンサーは利己性と利他性はやがて調和すると主張している。スペンサーがこの調和の鍵としているものの１つは共感能力である。ここでスペンサーが言及する共感能力とは、他者に感じた感情と同じ感情を自分の中に生じさせることを指す。スペンサーは、「私たちは、低級な生命の形態から最も高級な形態へと発展していくにつれて、若い個体と親の個体の両方の生命の犠牲の減少とともに、また、親が自分の生命を子のために犠牲にすることの減少とともに種の維持が達成されるという証明が与えられた」（271）と主張する。そして、同じような過程を人間の文明もたどってきたのだと続ける。スペンサーは、ある国家の最高の状態として、家族における福祉が発達していることと、社会の福祉が最もよく促進されることを挙げている。社会の構成員と社会全体の利害が一致し、そして、それらに対応する感情の調和が成りたちつつあると述べている。このスペンサーの考えの中に、利己性と利他性の調和のもう１つの重要な鍵が見て取れる。それは進化の過程である[5]。

このスペンサーの考えでは、進化の過程では自己犠牲は減少する。家族内での親の犠牲は、低次な脊椎動物の犠牲の場合に見られるものでさえ、長期間にわたる親の生活と両立するようになった親の犠牲は、犠牲の意識を伴わず、むしろそれをする直接的な願望から行われる。子どもへ向けられる利他的な行動は、親の本能を満足させるために行われる。子どもの世

5 『倫理学のデータ』におけるこのスペンサーの記述は、スペンサー自身が自身の著書である『社会学原理』第Ⅲ部での記述に基づいて展開されている。詳しい議論は『社会学原理』第Ⅲ部を参照のこと。

話が義務感よりも愛情によって行われている程度を観察すると、親の幸福の達成が子供の幸福の確保と一致するような利益の調和を見てとることができる。

しかし、社会の利他性には、親の利他性が持つ特定の要素が欠けているため、それと同等の段階に達することは決してない。それでもなお他者の幸福に奉仕することが日常の必要となる段階、すなわちより低い自己中心的な満足がこのより高い自己中心的な満足に常に従属される段階に達することは期待できるとスペンサーは論じている（272）。

そしてこの社会的な利他性を可能にするものこそ、共感能力である。上述したようにスペンサーは進化の方向は自他の利害の対立を軽減する方向に向かっており、共感能力の進化はその 1 つの証拠であるという。ではこの共感能力はどのように発達していくのだろうか。スペンサーによれば、生命進化の間には、生存条件が要求し、否定する行動への誘因として、快楽と苦痛が必ず存在する。ここで注目すべき暗黙の事実は、特定の条件下で部分的に苦痛を、そして部分的に快楽をもたらす能力は、快楽の余剰をもたらす限界を超えて発展することはできない。そして、もしその限界を超えて、快楽より多くの苦痛がそうした能力の行使から生じるならば、その成長は止まるに違いないのである。

人は共感能力を発揮することで、快楽と苦痛の感情の両方を生じさせている。快楽の意識は快楽を目にすることで呼び起こされることもあれば、苦痛を目にすることで苦痛を伴う意識が呼び起こされることもある。したがって、周囲の存在が通常快楽を示し、まれに苦痛を示す場合、共感は人に快楽の余剰をもたらす。逆に、通常はあまり快楽が生じず、多くの苦痛がある場合、共感は人に苦痛の余剰をもたらす。スペンサーによれば、共感により生じる快楽は、活力を高める快楽の全体に加わるため、最も共感的な人々の身体的な繁栄に寄与し、また、全ての人々の共感の苦痛を超える共感的な快楽が、それを強化する行使に導くのである。スペンサーは共感と、快楽と苦痛の関係について次のように述べている。

> 人間と社会が相互の適応に向けて何度も互いに影響しあう中で、適応できないことによって生じる苦痛が減るにつれて、適応から生じる快楽が共感は増大してく。（…）このような状況が可能にする共感の発達、それ自体が、苦の感情を減少させ、快の感情を増大させることの助けになる。そのような快の感情が有り余るほど増大していくことが、さらなる共感の発達を促すことを結果として生じさせるのである。（275）

スペンサーによれば共感が発達すると、苦痛が減少し、快楽が増加する。そして、苦痛が減少し、快楽が増加すると、共感がさらに発達する。この２つは互いに影響しあっているのである。共感能力を備えた個人は、周囲の快楽と苦痛に共感し、ある程度自分の中にそれを再現することができる。そして、その個人の周りに全体として快楽の方が苦痛よりも多いとすると、その個人の中には快楽が苦痛よりも多くなる。スペンサーは「ある能力が、快楽と苦痛を同時に生じさせる場合は、全体として、苦よりも快を多く生み出すのでなければ、その能力はそれ以上発達しない」という前提に立っている。したがって、この状況においては共感能力は発達を続け、利己性と利他性の対立は解消する方向に向かうのである。そして、この経過を経て、共感能力が発達した状態に関して、スペンサーはこう述べている。

> 最も発達した共感は、自分の利己的な満足だけではなく、他者の共感による満足にも配慮している。より高次の公平と呼ばれうるところのものは、他者の利他的行為の側面への侵略を防ぐものである。それは、低次の平等が、利己的な行為の側面への侵略を防ぐものであるのと同じである。そして、利己的利他性と言われるものも、このような確認機能により、各々の個人の不適切な犠牲は避けられなければならない。（281）

この利己的利他性とは、共感能力が進化の過程を経て発達することで到達する利己性と利他性の融和状態のことである。このような状態では、共感能力が発達することで、利己性と利他性の調和が進んでいるので、個人が自己の利益にかかわる衝動と他者の利益にかかわる衝動との間で揺れる必要がなくなる。それどころか、他者の利益にかかわる衝動を自己犠牲を伴うかたちで満たすことは、全くためらうことなく選好され、利他性から生じる衝動と自己の利益にかかわる利己性から生じる衝動との対立はほとんど感じられなくなるのである。こうした状態についてスペンサーは次のように述べている。

> このようにして（…）利己性と利他性の永続的な対立は消滅する。主観的に見ると、個人は自己中心的な衝動と他者中心的な衝動の間で揺れ動く必要がなくなる。それどころか自己犠牲を伴う他者中心的な衝動の満足が稀有なものになり、そして貴重になるにつれて、自己中心的な衝動との競合はほとんど感じられなくなる。また、主観的な調和は利他性的な快楽が得られるとしても、行動の動機は利他性的な快楽の達成ではなく、他者の快楽の確保となる。一方、客観的に考えても、調和は同様に完全です。もはや各人が自己中心的な主張を維持する必要がなくなるため、機会があればむしろそれらを放棄さえする傾向にありますが、同じような性質を持つ他者は、その人がそうすることをたいていの場合は許さないため、彼の人生を完成させるために必要な個人的な欲求の充足は確保されます。これは通常の意味では利己的とは言えないとしても、適切な利己性の効果が達成される。さらに、初期の段階で、利己的な競争がまず公正な分け前のみを求める妥協に達し、その後、他者に公正な分け前を取るように主張する調和へと進化する。同様に、最終段階での利他的な競争は、まず各人が過度の利他的な満足を取らないよう自己

制限する妥協に達し、最終的には各人が他者が利他的な満足の機会を持つように配慮する調和へと進化する。最高の利他性は、他者の利己的な満足だけでなく、彼らの利他性的な満足にも奉仕するのである。(284)

スペンサーはこのように利己性と利他性の調和がなされる論じている。人は共感能力を発達させることで、自分の快楽と苦痛と他人のそれを比較できるようになる。そうすると人は他人の幸福を求めて行為できるようになるだけではなく、他人はある別の者が自己を放棄することを防ぎ、その者の幸福も追求できるようになる。そしてこのような状態について、まだはるかに遠くにあると思われるかもしれないが、それを生み出すために頼ることができる要因は、どれをとってもすべて、最も高い本性を持つ者の間の影響のうちに既に明らかにされている。その中に今あるものは、時折しか見られず、微かなものであるが、さらに進化が進めば習慣的で強いものになる。そして、現在例外的に、高尚な人を特徴づけているものが最終的には、すべての人を特徴づけることになることが期待できるだろう。最善の人間本性に可能な者の大部分は、人間性の範囲内にあるのであるのだと結論づける（285)。

４．利己性と利他性から見るスペンサーの人間観

１節から３節までの議論で明らかになったスペンサーの利己性および利他性についての考えは以下のように要約することができる。

① 利己性が利他性に先行すると主張し、倫理学は、生物が行動する前に生存する必要があるという事実を受け入れるべきである。
② 利己性が利他性に先行すると主張しつつも、利他性も人間性の本質的な部分である。

③ 利他性は生物が自己犠牲を通じて種の維持に貢献することを指摘し、この利他性は進化の過程で発展してきた。また、利他性が利己性と相互に依存している。

④ 一見永続的に対立するように見える利己性と利他性は調和する。共感能力の発展がこの調和を促進する。彼は、利他性が利己性を高めると同時に、利己性も利他性に貢献する。この相互依存関係が進化の過程でより発展し、最終的には利己性と利他性が完全に調和する状態に至る。

ここから読み取れるスペンサーの人間観の一端は、一般的に言われる「社会ダーウィニスト」としてのスペンサー像、すなわち「ダーウィンの提唱した進化論から『進化』という現象だけを取りだし、進化は、弱肉強食によって実現」[6]されるという説を提唱したという通説の反例となっている[7]。またそのことは内井（1996）も認めており、「彼の進化論的倫理が通俗的な『適者生存』の倫理よりもはるかに深い奥行きを持つことは明らかであろう」（内井 1996, 91 頁）と評している。スペンサーが利他性を人間本性の一部として認め、共感能力の発展が利己性と利他性の調和を促進し、利他性が利己性を高めると同時に、利己性も利他性に貢献するという相補性を、方向性をもってはいるものの進化という過程から基礎付けていることを考えると、スペンサーの描いている人間像は弱肉強食を是として行動する野蛮な人間などでは決してない。そして、現在では例外的であれ、高尚な人を特徴づけているものが最終的には、すべての人を特徴づけることへの期待から明らかなように、スペンサーは人間の進化の局地に恒久の平和な社会を見ているのである。

6　たとえば、垂水（2014）140-143 頁。

7　伊勢田は「スペンサーは一般的に流布しているイメージとは違い、進化した社会の特徴として共感や善行というものを重視していて、通俗的なダーウィニズムと一線を画している」（伊勢田 2008, 157 頁）と評している。

一方で、この議論の中で内井（1996）はスペンサーが進化という言葉を用い、生物進化と社会的な進歩を通じて利己性と利他性が葛藤を解消する方向へ向かうと論じている議論を「極端な楽天主義」と評している。またスペンサーが共感能力の発達の際に一つの過程を持ち込み、「スペンサーは、結局、快楽説あるいは功利主義の倫理学に進化思想（実は進歩主義）の衣を着せて、『進化論的倫理学』とした売り出した」（内井 1996, 85, 93 頁）と論じている。

しかし、スペンサーは『倫理学のデータ』で一貫して進化を元に議論を進め、その中で快楽と苦痛を考察している。スペンサーの快苦の概念は、挟本（2000）[8]も指摘するように、生命現象全般に通用する概念である[9]。また、James (2011) が指摘しているように、「スペンサーによると、人類の卓越性にとって重要なのは行動」[10]であり、「動物から人間に目を移すときに見えるのは利己的行動の抑制を行う道徳的感受性」[11]であることを踏まえると、スペンサーが構想した恒久に平和な社会をもたらすために必要な社会的な調和を維持するためには、ある種の行動、自己及び他者の順応を阻害しないように目的に順応する行動が必要不可欠なのであり、その鍵を握っていたのが、共感能力の発達による利己性と利他性の調和だったのであると言えるだろう。

おわりに

本稿では、『倫理学のデータ』の中で論じられている 11 章・12 章・14 章（利己性 対 利他性（第 11 章）、利他性 対 利己性（第 12 章）、利己性

8　挟本（2000）247-248 頁を参照のこと。

9　スペンサーの快苦の概念についての議論は、詳細の議論は久野（2021）3・1 節を参照のこと。

10　James (2011), p.125. 引用の日本語訳は児玉訳に負っている。

11　*Ibid*., p.125.

と利他性の調和（第 14 章））の内容を中心に論じることで、スペンサーの人間観の一端に迫ることを試みた。進化の過程で共感能力を発達させることで、そこに見出されるスペンサーが描く人間像として、利己性と利他性の関係性、および利己性と利他性が完全に調和されていく過程とそこに見出される人間像について議論を進めた。しかし、スペンサーが依拠している進化の概念についてはその詳細に紙幅を割くことができなかった。この問題については、稿を改めて論じたい。

文献表

伊勢田哲治 2008『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会。

James, S. M. 2011. *An introduction to evolutionary ethics*. Blackwell［児玉聡訳『進化倫理学入門』、勁草書房、2018 年］.

Spencer, H. 1851. *Social Statics: or, The Conditions essential to Happiness specified, and the First of them Developed*. London: John Chapman.

Spencer, H. 1978 [1879-93]. *The Principles of Ethics*. 2 vols, In T. R. Machan ed. Indianapolis: Liberty Fund.

垂水雄二 2014『科学はなぜ誤解されるのか ― わかりにくさの理由を探る』平凡社新書。

挟本佳代 2000『社会システム論と自然』法政大学出版局。

内井惣七 1996『進化論と倫理』世界思想社。

柘植尚則 2020『近代イギリス倫理思想史』ナカニシヤ出版。

久野真隆 2021「スペンサーにおける行動の観点」『エティカ』（慶應義塾大学倫理学研究会編）第 13 号、1-27 頁。

（ひさの・まさたか　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

Egoism and Altruism in Spencer

Masataka HISANO

In *The Data of Ethics* (1879), Spencer claims that the establishment of rules of right conduct on a scientific basis is a pressing need. In order to attain this object, Spencer focuses his attention on the analysis of conduct (or behavior).

This paper focuses primarily on Chapters 11, 12, and 14 of "*The Data of Ethics*", where Spencer delves into the concepts of egoism versus altruism, altruism versus egoism, and the reconciliation of egoism and altruism. By mainly examining these chapters, this paper attempts to gain insight into Spencer's view of humanity and to present a different view of humanity from the one understood through the conventional interpretation of Herbert Spencer's philosophy.